

今期 4 年 9 月 5 日發行(編者 吳昌碩)
第 62 卷 9 月号(總合 256 号)

風土



9

死の時刻鏡太郎忌のギター鳴る

〔句集『竹取』より昭和四十二年作〕
 「鏡太郎忌」と言うのは、昭和三十七年の五月三日に亡くなった高橋鏡太郎の忌日です。桂郎師の『俳人風狂列伝』の最初に出てくる俳人で、その奇行ぶりが書かれています。鏡太郎は酒場ボルガで、ただ酒を貰ったあと、屋台のおでん屋に寄り、そこで更に酒をひっかけ、預けておいたギターを抱えて、崖っぷちに涼みにいったところ、そこで足を滑らせ、転落して亡くなったのです。不憫に思った桂郎師たちは五月三日に忌を修していました。

母の忌の徳利に似合ふ螢草

〔句集『竹取』より昭和四十二年作〕
 桂郎師の母キヨは昭和三十六年の七月八日に亡くなっています。キヨは文学好きの青年桂郎を精神的に支えてくれた人でした。その母の遺体をリヤカーで葬儀場まで運び、桂郎師の手で火葬にしました。桂郎師は母への供花を何にしようかと庭の螢草（露草）を摘んで、愛用の徳利に挿したのです。そしてつましい螢草が母には似合うと思っただのです。螢草は秋ですが、早咲きのものかもしれません。

鎌倉に涼しき風の東門居

〔句集『月虹』より平成二十二年作〕
 「東門居」は小説家で俳人でもあった永井龍男のことです。鎌倉に家を構えています。何よりも桂郎師の散文の師であり、桂郎師が終生慕った人です。おそらく器師も桂郎師に同行して東門居邸を何度か訪れたのです。東門居は文学仲間や俳人と自宅で定期的に句会を行っていました。特にお花見句会は盛大で、桂郎師はその時の句を残しています。季節は違いますが、涼しい風の吹く頃にもあったのでしよう。器師はそれを回想しています。

凶か吉か五風十雨に芋の花

〔句集『月虹』より平成二十二年作〕
 「五風十雨」とは五日に一度風が吹き、十日に一度雨が降ることを言い、転じて、風雨その時を得て、農作上好都合で天下の太平なことです。また「芋の花」は里芋の花のことで、晩夏に咲きますがめったに咲くものではありません。器師はたまたま見る機会を得たのです。さて、それが吉と出るか、凶と出るか判断しかねています。

雲の峰

南うみを

箸とめて馳走となさむ河鹿笛
とりどりのこゑの沸き立つ薔薇の苑
木漏れ日の揺れか緋鯉の斑の揺れか
枇杷の実に色来つつある雫かな
花南天目を瞑ること多き日の
あをばづく柱に父として凭れ
灯すやゆふべの揺れの萩わかば
みもり浮き生あたたかき寺の風
牛蛙鳴くたび雲の降りてくる
睡蓮のひらきつつ白ひるげつつ
夕焼に佇つ鍬の父畚の母
雑行を力と信じ雲の峰



竹間集

同人作品



パ Larson

土井ゆう子

あぢさゐの葉より濡らしてをりにけり
パ Larson や光と影の中の吾
でで虫の角出て思案定まるか
はたと止む風鈴の音誰か来し
トマトには塩が一番朝食に
献血の人の少なしつっじ燃え
里山の空に見ずなり夏の星

梅雨明け

内藤

静

大川を汐さかのぼる業平忌
業平忌いづれ菖蒲か杜若
鮎鮎をともかく一つ召せと言ふ
一刷のたれは秘伝ぞ穴子鮎
白南風や俳諧道場開け放ち
梅雨晴れて円位座像の目がきらり
センサーで吼ゆる閻魔や梅雨明くる

沖の雷

森高

武

十葉や寺の階段多過ぎて
山門に坐せば安らぐ夏の蝶
すひかづら鐘楼堂へ迫りけり
マスク取り六月の海の風を嗅ぐ
雷雲の真下や弁当食ひ終はる
沖に落つ雷のたちまち港まで
いかづちの囲む港の駐車場

濃紫陽花

池田

光子

禅寺の午後森閑と墓のこゑ
どくだみや寺の土塀の寸紗あらは
白日傘竜宮門へ吸はれゆく
夕暮れの竜宮門に落とし文
おしやべりな女三人濃紫陽花
ジェラートをなめて女の刻流る
朴一花 金剛山へ雲放つ

チカカ湖

豎山

道助

葉桜や梵も人間探求派
サングラス取ればタモリは森田君
子子の漢字忽ち立ち泳ぎ
白靴で渡る吊り橋三鬼の忌
黒南風や老いたり二十一世紀
雲の峰葦船で航くチカカ湖
鷗外忌眼鏡外して治哭く

清涼剤

落合

絹代

瀬戸内の穴子たつぷりちらし鮎
胸までの大船観音鮎の鮎
代替りせしも届くや焼穴子
ひと叢の虎尾草森の清涼剤
名の松の斃れしままに梅雨きのこ
噴水の芯に水神在す高さ
メロン切る熟れ頃冷え頃誕生日

祭船

浜

福恵

祭船高みに定家かづらかな
さつと一降り雄島祭に昼の雨
冠島に呼称七色海猫の夏
十葉の花の漢方説かれをり
峠めざして令法卯の花手毬花
蓬菜鶴亀古庭の空へ時鳥
掛樋の水の閑かや蛙の目

南風吹く

門伝 史会

一陣の風によるめく滝の丈
純白の滝に背すぢを伸ばしけり
山水に浸けある胡瓜丸かじり
溪流の石みな白き峪若葉
ところてん背中合はせに座りけり
塔仰ぐ傘に南音業平忌
南風吹く犬の床屋に犬あふれ

立 葵

岩木 茂

井戸水のするするすべる茄子の紺
白南風に釈迦三尊を解き放つ
天守より望む梅雨入りの明智麩
若鮎や由良川しなやかに曲がる
白鷺と補植の婆がひとつ田に
漁り火を沖に棚田の螢かな
立葵こころが七十路の花か

極 暑

山田 暢子

時々マスクを外し暑に耐ふる
紫陽花の白にはじまみ帰心かな
仏壇の灰を均して朝ぐもり
祭へは行かずお囃子遠く聴く
臥せをりて熱中症とは気付かざる
極暑かな天より雀落ちてきし
地上とは蚯蚓が涸れてゆくところ

青 嵐

小林 輝子

牧笛に牛追唄に青嵐
水無月の午後うすうすと己が影
法燈に近づき過ぎし夏の風
小半時読経緑風浴びにけり
涼風のばらばらめくる歎異紗
山擦る風や水木の花の湧く
五月雨蝶玻璃戸にひたと晴れを待つ

山河集

同人作品



南うみを選

立葵万歳しても届かざる

山田 健太

田の隅がいつも新鮮余り苗
整然と志士の墓あり四葩寺
青空を入れて膨らむ捕虫網
ありんこが吾子の出べその天辺に

衣更へてセーラー服の肘とがる

森田 節子

梅雨晴間子がびよんぴよんと水たまり
一貫は舌にとろけて握り鮎
スカイツリーの灯のむらさきに業平忌
太宰忌のをんなの覗く夜の川

レース着るセピアの中の母若し

松本 胡桃

日焼子の喉を鳴らして水飲み
青梅雨やガラス仕立ての美術館

雲の峰ビルの窓百占扱せり
滴りや靴跡 大きな山男

連山に風の濃淡 栗の花

根岸 善行

ずぶ濡れとなるや野となれ雷となれ
父の日の父に艶聞なかりけり
篝火の消えて川音 一夜鮎
糸とんぼ翅を広げて吹かれけり

緑さすインターホンに蝶の来て

中嶋 陽子

夏の月蝶の蛹のぶら下がる
遠泳の水尾の煌めき烏帽子岩
夏兆す太陽の絵の盛り上がり
風に乗り煌めきに乗り夏の蝶

風土独語／南 うみを



青空を入れて膨らむ捕虫網 山田 健太

俳句は読み手の想像力を補完して完成する。別の言い方をすれば、読み手に世界をどう描かせるか。この句を「青空の中に」とすれば作者が描いたことになるが、「青空を入れて」になると読み手が描くことになる。あとは読み手が自由に想像すればよい。この作者は読み手に描かせる術を会得している。

六月の植物園の匂ひかな 高橋まき子

この句は「六月」の時候季語をどう使いこなすかにかかっている。それを生かすのが「植物園の匂ひ」である。「五月」と違い、「六月」は草木の成長を更に進め、湿り気もある。植物園の多様な草木、花や水の匂いを「六月」だけで読み手に伝えている。

衣更へてセーラー服の肘とがる 森田 節子

この句の読みポイントは「肘とがる」である。衣更えて半袖になった少女の肘に焦点をあて、その「とがる」に少女の思春期（反抗期）を象徴させているのである。

雲の峰ビルの窓百占抛せり 松本 胡桃

「雲の峰」とビルを組み合わせた句で、いかにも都市部の「雲の峰」を描いている。恐らく高層のビルの窓も鏡張りのものだ。一種の都会美と言えよう。

鯖道の終の鮮屋の列につく 岡本 尚子

「鯖道」は若狭の小浜から京都へ山海の物を運んだ道である。特に塩鯖が有名だ。その京都の終着点が出町柳で、鯖鮮の店で有名だ。作者は老舗の鯖鮮を求めて長い列についた。

ずぶ濡れとなるや野となれ雷となれ 根岸 善行

面白い句である。眼目は作者が慣用を上手く活用しているところだ。「野となれ山となれ」を「野となれ雷となれ」とずらし、雷でも来いとやけくそになった気分を読み手に伝えている。

分蘖のすすむ田背ナに鮎を釣る 小原芙美子

「分蘖」とは、稲や麦などの根に近い茎の関節から枝分かれすること、丁度青田の時期と重なる。その田を背中にして鮎を釣っている、また鮎は中流に棲息するので、青田の地形も想像できる。一面の青田を背に鮎釣りを楽しんでいる。

風土集



南うみを選

梅雨の庭雀が散らす雨雫 逗子 高橋まき子

六月の植物園の匂ひかな

泣き顔で走つて来る兎屋寢覚

子二人の自主練習や夏の夕

ヨット今波の光の直中へ

新緑に身を深く入れ納骨す 水戸 山田 健太

手枕の父と仔豚の蚊遣香

庭火花しばらく腕照らしをり

父の日の妻は小言を一頻り

蚊帳吊つて蚊帳の中なる波の音

鮎鮮や沖島を発つ刺し網船 相模原 岡本 尚子

沖島の一家に一艘行々子

足踏みで鮎呑みこんで祭列へ

鯖道の終の鮮屋の列につく

遠乗りの流れに冷やす馬の足

分蘖のすすむ田背ナに鮎を釣る 舞鶴 小原芙美子

鮎の竿水の重みを釣りあげる

瀬音高し生簀にあける魚籠の鮎

売れ筋の海軍サイダーつとに買ふ

波頭少しく尖り梅雨に入る

天道虫見つめつくして飛ばしけり 高槻 六車 佳奈

大蟻に小蟻噛みつきしがみつ

朝顔の風にまきつく蔓の数

参観日プールのひかり教室へ

座につくやおほきくつかふ金扇子 上尾 根岸 善行

天心に辿りつき雷はなやげる

大の字もくの字も泳ぎ疲れかな

紫蘇の葉の食べごろ麺を茹でにけり

とうすみにいのちの重さ草たはむ

茄子の花富士は女神を祀る山